

歴史を繋いで



あげまき会東京支部

支部長 横川 益子

(高23)

母校創立百二十年周年、心よりお祝い申し上げます。母校はこの百二十年の間に約三万五千人もの卒業生を送り出してきたとの事です。

また今年には「あげまき会東京支部」も百周年を迎えて二重に喜ばしい年となりました。これはあげまき会東京支部に心を寄せて下さった母校の諸先生、あげまき会本部の皆様、そして諸先輩をはじめとする全ての会員の皆様のお陰と、心より感謝申し上げます。

母校は創立以来百二十年の間多くの卒業生を送り出し、その生徒の数だけ青春の喜びや悩みを見つめてきたことでしょう。私事で恐縮ですが、在学中月曜日の朝礼時に、生徒指導担当で数学の先生でもあった松村先生が毎週のように「いつも北高生らしくありません」と仰っておられ「北高生らしく」とはどんな姿を指すのか、多感な時期の私はその言葉を素直に受け止められず、反発を感じた事もありました。しかし今は先生の言葉を理解できる気がしています。百二十年の歴史の重みと申しましようか、北高の制服を着て歩いていた時の自分の中に無意識に持っていた誇りの様な気持ちは、その後の人生の色々なシーンで、支えの一つになっていったと思います。皆様にも同じような経験がおありではないでしょうか。松村先生の思い出はもう一つあります。数学の授業中大きなあくびをした私に教壇から「ホラ！その子、腹の中(なが)まで見えるあくびして！」と松村先生の大きな声が飛んで来ました、「腹の中まで見

えるあくび」何と適切な表現でしょう、先生のお陰でその後、公の場では腹の中まで見えるあくびは慎む様になりました。この様に校内にはいつも先生方の愛情あふれる空気が満ちていたことを思い出します。

さて、あげまき会東京支部に思いを馳せますと、初代支部長の浅野せつさんを抜きに語ることはできません。浅野せつさんは大正12年から昭和46年までの長きにわたり支部長を務めてこられました。百年前、女性が秋田から東京へ出てくるといのはどんなに大変な事であったか、さぞかし大きな生活の違いがあったことでしょう。東京支部創設二年後の大正12年に実際の活動開始をするのですが、この年は関東大震災が起きた年でもありました。そうして第二次世界大戦の戦火を経てこられた方々、中には無念のまま命を落とされた方もおられたことでしょう。このような困難な時代を経て、あげまき会東京支部は百年間も続いてきたのだと、記念誌発行を機に改めて考えた事でした。故郷を離れて母校を思う時の気持ちは、人それぞれの思春期の思い出に繋がり、人生の宝物として年代を超えて共有されるものだと思います。関東に母校の同窓会があることはその一助になっているのではないのでしょうか。この同窓会の灯を消してはならないと、身の引き締まる思いが致します。

東京支部役員会では色々な役割分担があります。副支部長、運営費の入金管理、会計、総務、庶務、会計監査、少ないメンバーでいつも話し合い、試行錯誤しながら毎年の総会を運営して参りました。至らない私を何かと支えて下さり感謝しております。そうして年に一度、一堂に会する総会を開ける時の喜びは何物にも変え難いものです。今後も未永くあげまき会東京支部が続くよう願っております。

最後にこの度の記念誌の発行に当たり、諸先生、諸先輩をはじめ多くの皆様から原稿を賜り感謝申し上げます。さらにお祝いのメッセージを添えて賛助広告にご協力くださった秋田県出身の起業家様、東京に支店のある秋田の企業様、秋田市内の高校の東京同窓会様やNPO法人の団体様から暖かなご支援を賜りました事を、会を代表して深くお礼申し上げます。